たり、

〔攝津名所圖會二東生郡〕浮瀨といふ遊筵の看樓は、新清水に隣る、原此名は貝觴の銘にして、其器を見るに、鮑の貝の、十一の穴あるを塞ぎて、酒をこれに盛れば七合半盛れるなり、これを滿酌して、飲する人を譽とし、暢酣牒を出し其名を署す、これ風俗なりとぞ、由緣齋が、

ひとつなる人に見せばや津の國の難波あたりの浮瀨の月　貞柳

此貝盃の袋は唐織にして、むかし長曾我部元親といふ勇將の陣羽織といふ、又幾瀨といふ貝盃あり、これは鶉貝なり、僅壹合餘盛れる、此袋も浮瀨と同じ、あるは銘を鳴門と號して、夜光貝の盃あり、紅毛わたりの貝巵、銘を春風といふ、君が爲、梅がえなどいふ、鮑の酒器あり、

〔鋸屑譚〕今人おほく石決明のうるはしきもて盃とす、或は浮瀨をもて名とす、楊升庵が丹鉛錄云、車渠作盃、注酒滿過一分不溢、車渠一名海扇、和名帆立貝、今多く匙杓に作るといへり、

〔德和歌後萬載集十雜〕淺草の酒家、うかむ瀨といへるたかどのにて、鮑の貝の大なる盃にて酒すゝめければ、　四方赤良

生醉とわらはゞわらへ味酒のみをすてゝこそうかむ瀨の貝

〔類柑子上〕みやこどりの序　僧專吟

なにはあたりの、うつせあはびをうかむ瀨と名づけて、奇物となせしは、身をすてゝこそのたはれことより出て、遠き境にも去る人すくなからず、こゝに扇德と云人、その俤を去たひて、一ッの器に盞を去つらひ、硯懷紙やうのものを添て、風騷の人々に句を乞、これをさかなになして、酒の興をあらしめんとす、箱の中の貝なれば、二見のうらなどゝも、よぶべかりしを、都鳥とは、もしむさしの國の名物、京には見なれずとかや、それにしては、ふたつともたよりうすし、たゞ水鳥とのこゝろなるべし、〇中略此比袖のうらといふ盞の、發句を勸進したり、いかならん旅客にや、其貝い